

# アジア・アフリカ図書館だより

## 第9号

令和6年10月

### アジア・アフリカ文化財団との交流から見たインドネシア

#### — パネル展示と現物展示で —

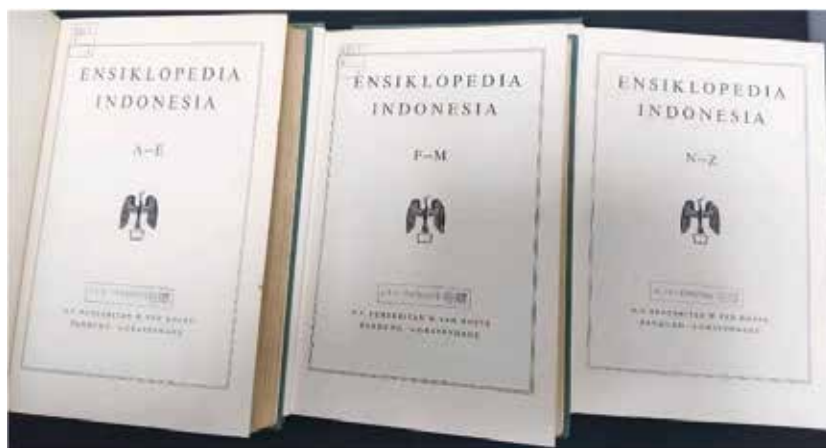
インドネシアは東南アジアの中心国です。その民族・文化・言語・宗教は多様で、多様性の中での統一を国是としており、多様性こそこの国の活力の源泉になっています。

去年は、日本とインドネシアとの国交樹立65周年に当たり、日本国内でもそれを祝う行事が各地で行われました。インドネシア大使館も Indonesia Friendship Day と銘打ってインドネシアの文化や料理を紹介するイベントを各地で行いました。

わが国とインドネシアは、インドネシアの独立以来、政治、経済、文化に至るまで密接な関係を築いてきました。当図書館においても、特に館創設当時、活発にインドネシアと交流を行い、それにより今日の礎を築いたとも言えます。当図書館には交流によって寄贈された原書などが相当数所蔵されています。

今回の特別展示は、そうしたインドネ

シアについて、国土や自然の特徴、民族や言語、宗教の多様性、独立を巡る理念や歴史、文化の背景などを分かりやすくパネルに纏めました。また、当時の大統領をも含むあまり知られていない当財団との文化交流についても、写真やインドネシアから贈られた原書の現物展示等を交えて紹介しています。皆様のご来館をお待ちしております。



インドネシア語の百科事典

#### 図書館長あいさつ

##### 歴史と伝統を生かした図書館像を目指して

利用を広めるには、図書館の中身すなわち“顔”を明らかにすることが大切です。アジア・アフリカ図書館所蔵の文化財は、中国の偉大な文人郭沫若から寄贈された貴重な書籍・資料を中心に、60余年にわたるアジア・アフリカ諸国との交流や活動の中で培われた図書・資料から成り立っています。

交流は、創設当時からインドネシアが極めて盛んでインドやエジプトなども密接でした。その交流は、日本及びアジア

##### アジア・アフリカ図書館長 篠原 昭雄

各都市で催された当図書館主催の「アジア文化展覧会」や「現代日本文化展覧会」などに活かされました。

このたび特別展示に諸般の事情からインドネシアをテーマに取り上げることになったことから、図書館との交流との観点を含めて紹介することにしました。インドネシアは、国土や資源に恵まれ、文化や言語の多様性を統一した大国で、アセアンの中心国でもあることから展示を通してインドネシアへの関心が深まることを期待いたします。

## インドネシアとは

インドネシア共和国は、赤道にまたがる数多くの島々と多様な民族から成り、国土の面積 194 万km<sup>2</sup>（日本の約 5 倍）、人口 2 億 7,753 万人の広大な多島海にある国です。

17 世紀初頭から 350 年に及ぶオランダ領インドとしての苦境を脱し、太平洋戦争中の日本軍の占領の時期に、独立民族主義が高揚し、多様な民族を統合する五原則（パンチャシラ）を国是にして国づくりを進めてきました。

その五原則とは①唯一神への信仰、②公正で文化的な人道主義、③インドネシアの統一、④合議制と代議制における英知に導かれた民主主義、⑤全インドネシア国民に対する社会的公正の 5 つの事です。

## インドネシアの国章「ガルーダパンチャシラ」

神話や文学にでてくる鷲（ガルーダ）をモチーフにしたこの国章には、この国の特色がよく表れています。インドネシアの国営航空会社も「ガルーダ」を名乗っていますが、この鷲にはインドネシア人の理想と現実がいろいろな形で盛り込まれているのです。



ガルーダが両足で踏まえている「BHINNEKA TUNG GALIKA（ビネカ・ツンガル・イカ）」は、インドネシアの「多様性の中の統一」を示し、金色に輝く栄光のガルーダが左右に広げた翼の 17 枚の羽根と尾翼の 8 枚は、インドネシア独立宣言の日 8 月 17 日を示しています。また、ガルーダの胸に掲げられた盾は闘争と自己防衛を意味し、盾の中の 5 つの図柄は「パンチャシラ」を象徴しています。

黄色の星の黒い盾は第一の原則“唯一神の信仰”

鎖の輪（四角い鎖は男性、丸い鎖は女性を表す。）は第二の原則“公正で文化的な人道主義”

ベンガルボダイジュ（バニヤン）の樹は第三の原則“インドネシアの統一”

赤地の中の牛（banteng）の頭は第四の原則“合議制と代議制における英知に導かれた民主主義”

稲穂と綿花は第五の原則“全インドネシア国民に対する社会的公正”

盾の中央部を横切っている黒い線は 4 つの大島が国土を横断している赤道を示し、図柄の赤と白は国旗に示される国家の色です。

## 多様な言語をインドネシア語に統一

インドネシア言語開発センターによれば、国内で話されていた民族語は 415 もあり、多数が使う言語としてはジャワ語 6000 万人のほか、スンダ語 2,400 万人、マドゥラ語 600 万人、ミナンカバウ語（西スマトラ州）500 万人、バリ語 260 万人、バタッタ語（スマトラ島）254 万人などがあります。

こうした状況の中、国の統一言語を定めるとなりました。多数派はジャワ語ですが、多数派の言語を統一言語とすることは、特定の民族の支配に繋がりがねず、新しいインドネシアの革命精神に沿わないという理念から、言語学的にはマレー語（ムラユ語ともいう）をもとに多様な民族を統一するための言語をつくったのです。インドネシア人というアイデンティティと結びつく国語としての「インドネシア語」です。



東南アジアの言語

## 文化の重層性

インドネシアの文化は、国土の位置や環境、歴史等の要因から、基盤であるマライ文化の上に、インド・中国・イスラム・ヨーロッパなどの文化圏から外来文化が累積した性格をもっています。

特有のワヤン劇（影絵芝居）やガムラン音楽や舞踏などの民俗芸能、バティック（更紗）織や染め、金銀細工、木彫りなどの固有の工芸は、こうした背景によって発展しました。バティック（更紗）は、スカルノ大統領時代には民族統一の象徴として「バティック・インドネシア」と言われたものもあります。また、当図書館ではインドネシアの特色として「ワヤン」を取り上げて特別展示を行ったことがあります。



ワヤンの人形

## 写真で見る財団とインドネシアの交流

### インドネシア語図書

1958-1964年にインドネシア政府から寄贈を受けた資料が中心で、ブリヨノ文庫と呼ぶにふさわしいものである。

1958年 図書館開館の年ブリヨノ文相からインドネシア語図書寄贈 1,200冊

1963年 インドネシア文部省からインドネシア語辞書「KAMUS UMUM BAHASA INDONESIA」など20冊を受領。



インドネシア語図書の書架



「ブリヨノ文相」と明記された寄贈印

### 【踊るスカルノ大統領】

語学院生12名、ムルデカ宮殿に招待（左端 渡辺和子先生）

スカルノ大統領の公邸の歓迎会で大統領自ら立って学生を激励し、男女2名の無期限招待留学を宣言した。



出典：「アジア・アフリカ文化財団の二十五年」（1982年）

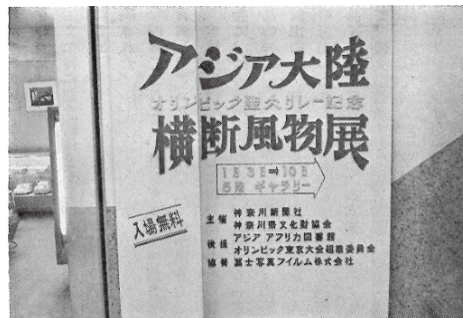


スカルノ大統領公邸の歓迎会 スカルノ大統領（前列左から五人目）菊地三郎（インドネシア語学院新修学生団団長（白服））とブリヨノ文相（黒服）1963年7月

出典：「アジア・アフリカ文化財団の二十五年」（1982年）

### 1964-1965年

ブリヨノ文相を団長とするインドネシア文化使節団35名（翌年74名）が文化交流のために来院した。



横浜・有隣堂で開催の「アジア大陸横断風物展」会場入口（1964年1月）

出典：「アジア・アフリカ文化財団の二十五年」（1982年）



横浜・有隣堂で開催した「アジア大陸横断風物展」会場（1964年1月）——展示品のすべてはアジア・アフリカ図書館の提供である

出典：「アジア・アフリカ文化財団の二十五年」（1982年）

### 1964年「アジア大陸横断風物展」

#### （第1回横浜会場）

東京オリンピック（1964）を機会に図書館所蔵の全資料を公開する「風物展」を仙台、山形、横浜、水戸、川崎、八王子、甲府、長野、姫路、徳島、岡山の11市で開催した。オリンピック東京大会組織委員会の全面的後援を受け、オリンピック募金の協力展となった。



インドネシア歌舞団歓迎 団長ブリヨノ教育文化相（右）を先頭に74名をキャンパスに迎える（1965年7月）

### ▶ 草創期「中文研」資料の整理作業

中日文化研究所（以下、「中文研」）の創立者・菊地三郎先生が、戦後の上海で刊行された『改造日報』の原紙を遺していたことは、本紙第6号（令和2年11月）で紹介した通りですが、菊地先生が遺していた資料の中から、『改造日報』と一緒に草創期（1946年～1956年）の中文研に関連する諸資料も見つかっています。これらの資料は発見後しばらくは手つかずとなっていました。シンポジウム「戦後上海における対日情報戦のグレイゾーン―『改造日報』を中心として」の開催（2023年11月）が契機となり、このシンポジウムに登壇した研究者を中心とする「中日文化研究会」（代表：高綱博文日本大学名誉教授）による資料の整理と研究が始まっています。

これらの資料は、戦後の日中文化交流の一端を明らかにする貴重な史料であると考えられることから、アジア・アフリカ図書館において公開することを念頭にデジタル化の作業が進められています。

### ▶ 留学生用図書の充実

アジア・アフリカ図書館では、令和6年4月、新たに留学生用図書を約180冊配架したことを皮切りに、その充実に力を入れています。主な内容は、日本語検定試験をはじめとする各種試験対策の問題集、日本での就職に役立つ様々な分野の業界研究本、各業界で使われる特徴的な日本語会話集、読解力のレベルアップに向けた日本語多読用図書等です。また、留学生相互のコミュニケーションの一助となることを願い、若者向けのファッション誌や街歩きの雑誌等も試行的に配架しました。要望を聞きながら、今後、さらに充実を図ってまいります。



### ▶ インドネシア関係の著書を寄贈してくださいました

令和6年度は、特別展示のテーマに合わせて「インドネシア」に焦点を当て図書を収集しております。研究者や専門家の先生方が貴重なご著書やプロジェクトの成果物を寄贈してくださいましたので、ご紹介いたします。先生方には厚く御礼申し上げます。

| 図書名                   | ご寄贈者        |
|-----------------------|-------------|
| インドネシアの宗教美術 改訂版       | 伊藤奈保子様      |
| 日系インドネシア人のエスノグラフィ     | 伊藤雅俊様       |
| 変容するインドネシア            | 小川 忠様       |
| インドネシアの王都出土の肥前陶磁      | 大橋康二様       |
| 「国家英雄」が映すインドネシア       | 金子正憲様       |
| インドネシア 21 世紀の経済と農業・農村 | 加納啓良様       |
| 近代東南アジア社会経済の国際的契機     | 籠谷直人様・川村朋貴様 |
| 「華人性」の民族誌             | 津田浩司様       |
| 日本軍政下ジャワの華僑社会         | 津田浩司様       |
| 災害復興で内戦を乗り越える         | 西 芳実様       |
| 復興の文化空間学              | 西 芳実様       |
| 夢見るインドネシア映画の挑戦        | 西 芳実様       |

### ▶ 「みんなみフェスタ」への協力と古本市の開催

三鷹市南部図書館開館のイベント「みんなみフェスタ」の開催にあわせて「古本市」を開催します。なお、今年度の「みんなみフェスタ」ではインドネシアのバティック（ろうけつ染め）のワークショップを開催します（当図書館企画協力）。詳しくは三鷹市南部図書館（電話0422-76-5571）までお問い合わせください。

#### 【古本市】

日 時 11/23 午前11時～午後4時

場 所 アジア・アフリカ図書館

#### 【バティック・ワークショップ体験】

親子の参加、歓迎！ お一人でも！

日 時 11/23 午前の部 10時開始

午後の部 1時開始

午前、午後とも2時間程度 参加費無料

場 所 アジア・アフリカ語学院3階教室

公益財団法人 アジア・アフリカ文化財団経営 アジア・アフリカ図書館

開館日：火（予約制）、土、日（年末年始を除く） 開館時間：12時～17時

〒181-0004 東京都三鷹市新川5-14-16 Tel：0422-44-4640 Fax：0422-46-5107